平成12年（2000年）7月1日毎月1回1日発行　協力　CAL／松竹京都映画撮影所／テレビ朝日／東映／TOWANI／WOWOW

Kyoto Hollywood News
京都ハリウッド通信

滅び行くフィルムに愛を込めて――
メジャーから生まれたインディーズ・ムービー
「ストップモーション」に映画の未来がある！

映画が滅ぶ――。正確には映画に関する様々な技術と技術者が、ひっそりと消えていこうとしている。こう聞いて耳を疑う人がほとんどだろう。テレビは絶えず放送を続け、CSやBSで他チャンネル化も進み、レンタルビデオ店には様々なソフトが並ぶ。そしてプレステ2の普及でDVDが花盛り。でも、映画は確実に苦境に立たされている。

映画はフィルムで撮影され、上映されるのが基本。テレビドラマもかつては同様だったが、昨今ではビデオドラマが大半を占め、フィルムの需要は激減。ブラウン管に映されれば同じ映像でも、フィルムとビデオでは工程や技術は大幅に異なる。つまり、フィルムの需要が減ったという事は、様々な映画の技術が衰退している事でもあるのだ。

例えばシネマスコープ。一昔前に劇映画と言えば、画面サイズは横長のシネマスコープが常識だった。だが現在、日本映画でシネマスコープ作品なのは、松竹の「釣りバカ日誌」シリーズのみ。後は岩井俊二監督がシネマスコープにこだわって奮闘している程度で、技術や人材、そして機材も衰退の一途をたどっている。

日本映画からシネマスコープを駆逐した主は、ビデオソフト。シネマスコープは画面比1：2・35という、超ワイド画面。これだとテレビのブラウン管に収まり切らず、テレビ放映時やビデオソフトの再生時に都合が悪い。そこで現在はシネマスコープよりも画面比が小さいビスタサイズ（1：1・85）を標準としている。つまり現在の日本映画のほとんどが、初めからテレビに合わせて撮影されるという、実に嘆かわしい状況に置かれているのだ。

このシネマスコープの日本第1号作品は、1957年に東映京都撮影所で製作された「鳳城の花嫁」（監督／松田定次・主演／大友柳太郎）だ。その東映京都撮影所が1999年は、1本も劇場映画を生み出さなかった。それは東映京都撮影所49年の歴史中で初の、悲しい記録である。

だが、奇跡は起こった。東洋一の撮影所で劇場映画が1本も製作されなかったその年、その撮影所の若手スタッフによる35ミリ・シネマスコープ・ドルビーステレオを採用した画期的なインディーズ・ムービーが誕生したのである！

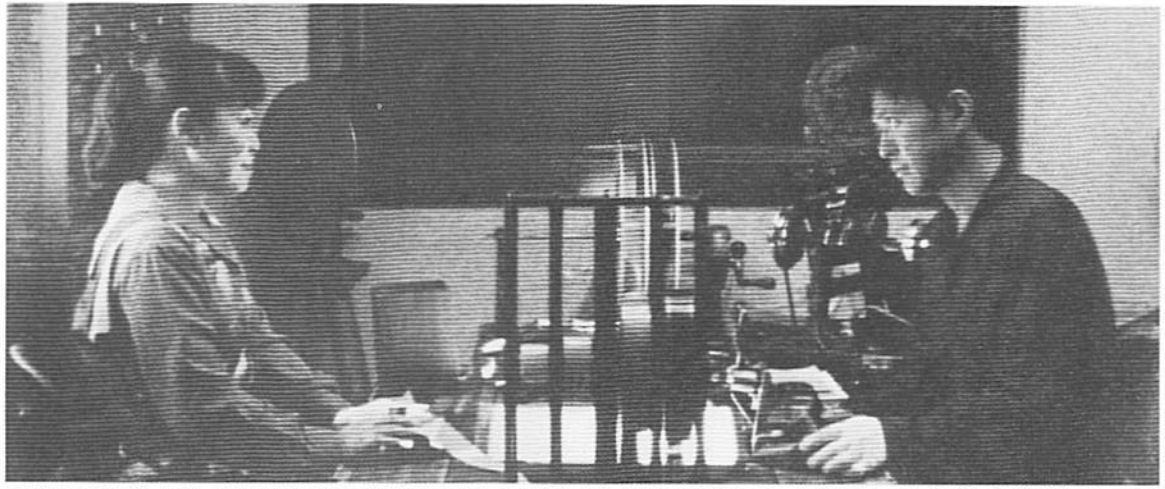
タイトルは「ストップモーション」。東映京都撮影所の編集部に所属する米田武朗氏が制作・脚本を担当。同僚で現在はフリーの寿野俊之氏が監督。そして総勢137名のスタッフが参加し、4年8カ月を費やして完成した。

そもそもの発端は、大学時代の友人でホテルマンとなった阪野登氏が、映画を作りたいと米田氏に話を持ち込み、資金の提供を申し出た事にある。話を聞いて寿野氏の脳裏によみがえったのは、試写室を引退した先代の老映写技師の言葉と遺産だった。

シネマスコープの撮影が途絶え、専用の映写レンズも使用される事もなくなった。試写室のスクリーンも黒幕を左右に釘付けにし、無理にビスタサイズ幅に狭められた。老映写技師は試写室を去る日、桐箱に収められたシネマスコープ専用レンズを、寿野氏に渡し言った。「いつか釘付けにされたスクリーンを、このレンズを使って解放してくれ。もう一度あのスクリーンに、シネマスコープ作品を映してくれ」と――。

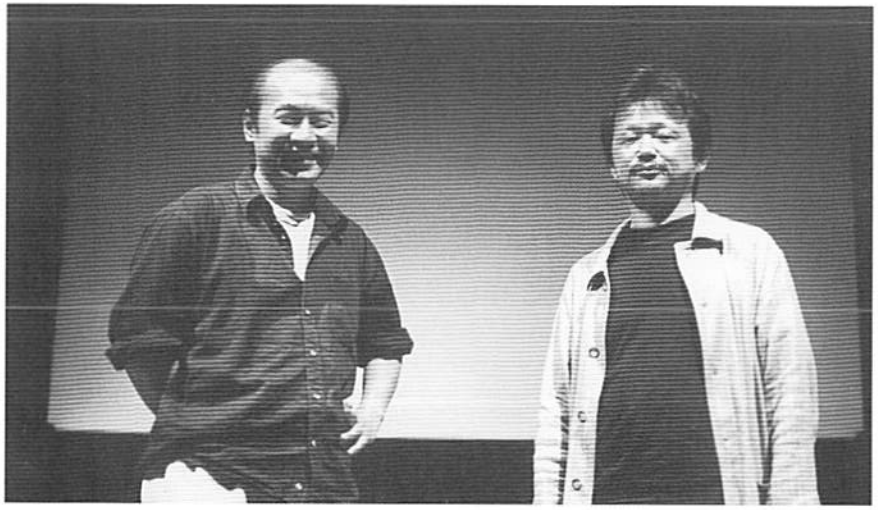
だが既に、シネマスコープ撮影用の機材を集める事が難問であった。撮影所にですら揃っていないという、映画の衰退を目の当たりにする厳しい現実があった。やむなく35ミリのカメラを購入、関西の劇団を廻ってイメージに沿う出演者を探し求め、苦難の末ついに完成。釘付けにされたスクリーンは、およそ20年ぶりのシネマスコープ作品「ストップモーション」を上映するために拡張された。

奇しくもそれは、日本映画生誕100年を迎えた1999年5月の事であった――。



これがシネマスコープ・サイズ。劇場では大迫力だが、テレビのブラウン管に収まり切らないため、日本映画では採用をストップ。出演は元「劇団☆世界一団」所属で、現在は劇団「NEXT」を主催する都木淳平、元「感星ビスタチオ」でテレビでも活躍中の佐々木蔵之助など。主題歌は大黒摩季。1本の映画のラストシーンを巡る、編集マンの土岐次郎（都木）と監督の原口（佐々木）らスタッフの葛藤を描く。9月頃に大阪の天六ホクテン座、国名小劇で上映予定。問い合わせは両劇場の事務所、06－6213－9229まで

制作・脚本の米田武郎氏（右）と監督の寿野俊之氏。後ろにあるのは東映京都撮影所試写室のスクリーン。ビスタサイズに固定した左右の黒幕を外し、念願のシネマスコープ・サイズで映写。同撮影所では20年ぶりの事である



妖怪映画のルーツは京都だ！「さくや妖怪伝」第２報

先月もご紹介した妖怪特撮時代劇大作「さくや妖怪伝」は、かつて大映京都で製作された妖怪映画の金字塔「妖怪百物語」、「妖怪大戦争」、「東海道お化け道中」の妖怪３部作を敬愛する原口智生監督が、その流れを継いだ渾身の京都発妖怪最新作だ。大映妖怪シリーズに携わったベテラン・スタッフも多数参加し、原口監督も感無量。８月上旬全国公開に期待！

妖怪乱舞！特殊造形家でもある原口監督が丹精込めて造形した妖怪の数々を特別公開！

大河童。咲夜の父・芳明の命を奪った強敵

怒霊武者。ありそうでなかった日本映画初のキャラクター

化け猫。日本の怪談映画を代表するキャラクター

森で働く善良な妖怪たち。釜だけなど、おなじみ妖怪が乱舞

妖怪対抗戦！柳生家の一族・安藤希一父の主従を従えて様々な妖怪と闘う

咲夜の父・柳生新守芳明は藤岡弘が演じる

土蜘蛛の女王。造形物ではありません。演じるは松坂慶子

お待ちかね「赤面ゑびす」の放映が７月20日・夜10時に正式決定。今回の見せ場は本田博太郎演じる甲兵衛が繰り広げる、残虐な拷問のオンパレード。捕らえた盗賊を互いに殺し合わせ、生き残った者を個別に、ひざを抱えて入れるのがやっとの、小さな鉄の檻に監禁。額に焼き印をおすは、煮え湯を無理やり飲ますは、ついには鉄板焼きにするはとやりたい放題。８月12日より第１作「七人みさき」ディレクターズ・カット版の劇場公開も決定し、ますます盛り上がる「京極夏彦・怪」に注目！

笑うと死ぬ！煮え湯から鉄板焼きまで拷問の極致！「京極夏彦・怪」其ノ参「赤面ゑびす」

拷問シーン其の一　ろうとを無理やりくわえさせ、煮え湯を注ぎ込む！

拷問シーン其の二　鉛針を口に引っかけて振り回し、最後は櫃で打ち殺す！

中村玉緒「暴れん坊将軍」に押し売り！長寿番組の影に亡夫と主役の美談あり

「暴れん坊将軍」（テレビ朝日・毎週木曜日夜７時放送）に押し売り出演（？）の中村玉緒。主演の松平健は、玉緒さんの夫・勝新太郎の愛弟子。玉緒さんの出演は６月下旬と又の予定

昨今の活躍目覚ましく、ついにCM女王の地位を獲得した中村玉緒さん。その玉緒さんが人気テレビ時代劇「暴れん坊将軍」に、何を押し売りしたのか？　それは自分自身である女優・中村玉緒。「この番組は、いつも私の方から出させて下さいって、半年前からスケジュールを空けて、押し売りみたいに頼んでいます」と語る玉緒さんが演じるのは、主人公・徳川吉宗の生母・お由利の方。

「暴れん坊将軍」は言わずと知れた松平健主演の、今年で放送23年目を迎えるテレビ朝日の人気時代劇。玉緒さんは昭和59年３月放送分に女医者としてゲスト出演。その翌年からお由利の方として現在まで、押し売りセミレギュラー出演。「お由利の方は庶民の出で私にはぴったりの役。今の私にはバラエティーのイメージが強いのですが、お由利の方は品よくやるつもりです」。品よくと言った後から「グフフフ」と、いつもの笑いをする玉緒さん、「この作品に出ると毎回、すがすがしい気持ちになるんです」と晴れ晴れとした表情。そんな玉緒さんを松平健はさぞかし迷惑、と思いきや玉緒さんの押し売りに始終ニコニコ。

実は玉緒さんの夫で名優の故・勝新太郎と松平は師弟の間柄。勝の付き人として俳優修行を重ねた松平は、二〇代半ばという若さで異例の大抜擢を果たし、「暴れん坊将軍」の主役となった。玉緒さんは初めてゲスト出演した時の事を思い出し「撮影所（東映京都撮影所）について来た主人が、あれこれ松平君に演出していた事を懐かしく思い出します」と感慨深げ。

勝の晩年、「病院で番組を見て、松平君の立ち回りが上達したと喜んでいた」と聞かされた松平は「初めて聞きました。勝先生と二人だけで会っても、お互いあまりしゃべりませんから」と、秘められた師の愛情を偲び、感無量。「番組の目標としては『銭形平次』の888回を抜いて、1000回を目指したい。888回で僕は50歳、1000回だと60歳近くになりますが、それまで頑張りたい」と、気を引き締めた。

それを聞いた玉緒さん、「それやったら、早いペースで放送してくれなかったら、1000回の時には私はこの世にもういません。現代劇やったら遺影とか写真でも出られるけど、時代劇ではそれも無理ですから（笑）」と、1000回への出演に意欲満々。玉緒さんが押し売りする「深い愛情」に、撮影所は始終アットホームな雰囲気に包まれたいた。

もはや「カンバン」の風格　高島礼子・三度目の極妻

出演は高島礼子、田中健、裕木奈江、大沢樹男、豊原功補、池上季実子、他。７月22日より劇場公開予定

東映京都撮影所のドル箱シリーズ「極道の妻たち」を岩下志麻から引き継いで、看板となった高島礼子のシリーズ第３作「極道の妻たち　リベンジ」が５月より撮影を開始。京都市内を中心にロケが行われた。さて極妻と言えば、毎回の決め台詞が名物。今回の決め台詞は「女をなめたら承知せえへんで！死ね！」

共演の田中健は再婚後の初仕事。会見に出席したメンバーは全員既婚者だからか、記者の質問は「夫婦」について集中。そんな中「盗まれた500万円はどうなったんですか？」と不意打ちの質問に「さあ、どうなったんでしょう」と高島礼子、「その穴埋めにこうして一生懸命お仕事してるんですう」

今月の言葉

「京極夏彦・怪」第１作「七人みさき」ディレクターズ・カット版の劇場公開が決定した。８月12日より東京は渋谷シネパレス、大阪は梅田シネマアルゴにて公開。企画からそろそろ２年、視聴率もWOWOW歴代トップを記録し、劇場公開にまで至るとは望外の喜び。劇場で大勢のお客様と共に見るのが、今から楽しみだ。

2000年7月1日　山田誠二

責任編集人　山田誠二

1963年生まれ。京都を拠点に、映画のプロデュース、脚本、評論の執筆、コミック原作など多方面で活躍する作家、映画関連著作多数執筆。